
シャイデレ！

紫水晃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シャイデレ！

【Nコード】

N3663E

【作者名】

紫水晃

【あらすじ】

ちよつとシャイな女の子に想われるコンチクショウな主人公に対して、純粹で一途なる想い……殺意を抱く物語 ではありません。まあ、読んでもらえれば分かります。興味のある方は、どうぞこの『シャイデレ！』の世界を覗いてみてください。安心してください。覗きだと訴えるつもりはありません。

プロローグ【ちょっとシャイな女の子?】（前書き）

勢いで創った。（全話制作時間五時間ジャスト）

今は心の奥底から後悔している。

短編にするつもりで創ったのですが、長くなりすぎて連載にしました。六話完結予定です。話の長さはちょうど区切りの良いところで分けているのでマチマチです。

では、どうぞお楽しみ下さい。

プロローグ【ちょっとシャイな女の子？】

朝日がようやく頭を見せ始めた頃の薄暗い時間帯。春はまだ始まったばかりで、身を切るような肌寒い風に新聞配達の人も思わず顔をしかめるほど冷たく感じるこの時間帯に、……彼女はいた。

【飯石^{いいし}】という表札が掲げられた一軒家の前で、彼女は激しく脈打つ胸を押さえ、身体の火照りを抑えるように何度も冷えた空気を深呼吸しては吐くのを繰り返している。

整った顔立ちは興奮のせいか朱に染まり、まだ真新しいセーラー服が青と白を基調にした色彩をしているので余計際立って紅く見える。……そして服のサイズが少し小さいためか、スタイルの良い身体凹凸もまた際立って見えた。

そんな、一目で美少女だと納得する容姿を持った彼女の名は輝閃^{きせん}コウゲツ 皇月。聖帝第二学園の高等部一年生の十五歳である。

学園では『容姿端麗才色兼備しかも文武両道の完璧超人』だとか、『清楚で可憐な良妻賢母(?)』等と絶賛されている。他にもいろいろと呼ばれているが、うんざりするほど多すぎるので割愛するでしょう。

さて、そんな彼女がなぜここにいるのか。それは彼女が困ったことに あ、いや、もう少し様子を見ていれば分かると思うので、

彼女の行動をもう少しだけ見てもらいたい。

ようやく心の準備が出来たのか、彼女は最後に一呼吸軽く息を吸い込むと、キリツと口をつぐみ、顔を上げ、ゆっくり、ゆっくりと右腕を上げていく。

その先にあるのは玄関の呼び鈴。左手はいまだ胸の前に置いており、そこから自分の心の内へと一つ念じながら人指し指を形作っていく。

さあ、逸る心を落ち着けて。

そう自分に言い聞かせながら、…彼女の微かに震える指が、静かに呼び鈴へと触れる

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピン

鬼のような連打だった。

「だあぁっ！　うつせええッ！！　毎日毎日誰だよチクシヨオオオオオオオ！！！！！！」

二階の窓から家の住人が怒声を発して間髪入れずに顔を出す。憤怒した表情ですぐさま辺りを見回すも、時既に遅し。人の姿はどこにも見当たらなかった。

「ク、クソツ……！　またいない！　なんて逃げ足の早さだ！　いつたい誰がこんな嫌がらせを……！」

心底激怒した様子で悪態を吐くこの少年の名は出流^{イスル}。高校に入学した当日に突然父親が海外に出張に行くことになり、それに母親も一緒に付いていったため、現在この家で一人暮らしをしている。

当初、いきなり一人暮らしをすることになりなにかと不安を抱いていた彼だったが、父親に『お前のことはある人に任せているから心配するな』と言われ安心していったのだが……。

高校に入学して今日まで一週間。誰も来ることはなかった。しかも代わりにピンポンダッシュが毎日来る始末。

騙された！？

と気付いてももう遅い。両親はとくに海外へと飛び立っている。その騙されたことの怒りに加え、毎日のようにピンポンダッシュをされているので彼の我慢の限界も近かった。

「絶対見付けだして訴えてやるから……！　あー、もう！　まだ五時半じゃねーかよ！　……ハア……もう眠れそうにないし………暇だし、弁当でも作ってみるかなあ………」

軽く溜め息を吐いてそうぼやくと、寝癖でボサボサになった髪を掻き、開け放たれた窓から冷たい風が流れ込んできたので身を震わせつつ急いで窓を閉めた。

「……………」

その様子を、計算され尽した絶妙な角度で電柱の陰に隠れてじつと眺めていた彼女は、やがて心底幸せそうな、見る者全てを虜にするような愛くるしい笑みを浮かべると、一言。

「おはようございます」

……そう。

学園では『容姿端麗才色兼備しかも文武両道の完璧超人』だとか、『清楚で可憐な良妻賢母(?)』『等と絶賛されている彼女は、困ったことに、

ちょっとシャイな女の子だっストーリーたのです。

（じじく）

第1話【弁当箱の悲劇】

「…………ハア」

「およ？ 若者が随分とまあ不景気な溜め息を吐いてんなあ」

聖帝第二学園一年A組の教室で、飯石出流の溜め息に友人の宮間^{みやま}祐一^{ユウイチ}が反応する。

「どうした？ メロンパンを買ってくるのを忘れたのか？」

今は昼休み。いつも食べているメロンパンを出さず溜め息を吐く彼を見てそう勘違いしたようである。

「ああ。そついやお前、珍しく三、四時限目とずっと寝てたよな。購買部に行くの忘れてたのか？」

「いや…………違うよ。今朝もピンポンダッシュされたから少し寝不足なんだ」

そう言っただきな欠伸をする彼を見て宮間は事情を察し、気の毒そうに彼の肩に手を置いた。

「…………まーた、やられたのか」

「ここんとこ毎日だぜ……嫌になるよ……」

もう一度溜め息を吐く。誰かになんかの恨みを持たれたのか、それともただの悪戯なのか。あの呼び鈴の鬼のような連打からはどちらかなのか判断できない。

「……でもまあ、朝のモーニングコールだって思って、諦めたらどうだ？」

アハハと無責任な発言をする友人にギロリとした睨みを向ける。

「……まさかとは思うが、お前が犯人じゃないだろうな？」

「……ククツ。そうさ！ 俺が犯人 いや嘘だ。すまん」

悪ノリしようとした宮間だが、彼から本気の殺意を感じたので真顔で謝る。

「そ、それよりお前って飯あんのか？ ないなら一つわけてやるぞ？」

バツが悪くなり焼きそばパンを一つ取り出して寄越そうとした宮間だが、彼が机のすぐ隣に置いてある学園指定の鞆の中から弁当箱を取り出したのを見て目を丸くする。

「あれ？ お前一人暮らしたから、………弁当作ってきたのか？」

「ああ。暇だったし、とりあえず作ってみたんだよ」

「え？ 飯石くん、お弁当作れるんだ？」

感心したように二人の話に入ってきたのは、隣の席に座っているクラス委員長の内藤美代子^{なとうみよこ}である。三つ編み髪の勤勉少女だ。友達と談笑しながら食べていたのを中断して、彼の弁当箱を見てくる。

「ねえ、少し中身見せてみてよ」

「いいけど……。かなり雑だぞ」

今朝作ったときの出来を思い出してそう呟く。玉子焼きやソーセージは適当に炒めているし、ご飯は水が足りなかったせいかな少し力チ力チだった。見栄えは良いものではない。

「いいからいいから」

「俺も見せてくれよ」

あまり見せたくはなかったのだが、興味津々な内藤と宮間に促されるように彼はしぶしぶと弁当箱を開いた。

瞬間。

「……………は？」

「……………へ？」

「……………え？」

出流、内藤、宮間の三人の目が点になる。このとき、一瞬だが確かに時も止まったと思う。

呆然と固まる彼等の目の前には、真っ白なご飯　　の真ん中に玉
子焼きで描かれたでかどとしたハートマークと、

「イズル 激LOVE」

とケチャップで書かれた文字があった。

「……………」

辺りに重い沈黙が包む。それを作り出した当人である出流は、なにこれ？　なんで？　どうして？　と答えのない疑問をグルグルと頭の中で回したまま、まったく思考が働かない状態で停止している。

「……………はっ!？」

そこでふと視線を感じて顔を上げると、目を見開いて呆然として
いる内藤に、生暖かい目でこちらを見てくる宮間といつからいたの
か数名のクラスメイト達の姿があった。

……………そこでようやく、これは第三者から見るとイタイ人にしか見

えないことに気が付いた。

「ち、違……！」

彼が急いで否定の言葉を口にする前に、クラスメイト達は口々に勝手なことを言い始める。

「ハートマークか……」

「朝早く起きて、せつせと自分宛てにハートマーク……」

「悲しすぎる……」

「しかも「イズル 激LOVE」って……。どんだけ自分が好きなんだよ……」

「お前って、ナルだったんだな……」

言いたい放題だった。

「ご、誤解だ！ 俺はこんなの作ってないっ！」

「でもお前、さっき作ってきたって……」

「これじゃねえよっ！」

「はいはいわかったわかった。そういうことにしてやるよ」

「だからそういうことなんだって！」

まったく信じようとしないクラスメイト達にどうしようもない絶望感を抱きながら、彼は激しい怒りと共に吠えた。

「チクシヨオオオ！！ 誰がやったんだアアア！！！！」

それはまるで負け犬の遠吠えのように。ただ虚しく教室の中に響いただけであった。

「……………」

その様子を中等部の屋上から双眼鏡で眺めていた彼女は、“出流の弁当箱と全く同じ形の弁当箱”を片手に、ニツコリと、一言。

「どうぞ召し上がれ」

$$(\wedge u \vee u)$$

第2話【大切な思い出】

「クソ……。本当、誰がやったんだよ……」

六時限目の終わり頃。思ったより早く授業が終わったので残りの時間を自習で費やすことになり、生徒達が思い思いに楽しそうに雑談している中で彼だけが真剣に悩んでいた。

ちなみに、あの弁当は結局食べている。内藤に『食べないの？ 勿体ないから食べなさい』と叱咤され渋々口にしたのだ。……悔しいことに、かなり美味しかったそうだ。

「鞆はずっと足元に置いてあったし……可能性があるとすれば、三時限目の休み時間の……俺が寝てたときなんだよな……」

彼は目の前の席で帰り支度を行っている友人の宮間と話しかけた。

「……なあ、祐一。俺が寝てたとき、誰かが来て勝手に俺の鞆に触れたりしなかったか？」

「誰かがって言われてもなあ……」

教科書を鞆の中に詰め込む手を止めしばし思索する宮間。

「後ろなんてあんま見ないし、よく分かん」

「……そうか」

脱力して机の上に突っ伏する。

彼の席は一番後ろの窓際の近くにある。あまり目立たないところなので、やろうと思えば誰にも見られずにこっそり入れ替えるのは可能だろう。

「内藤は……」

隣の席なのでなにか知ってるかなと思い隣を見るも、友達と談笑中だったので遠慮することにした。

「……ああ、そういえば誰かは来てたな。それも珍しい人が」

突然の宮間の含みのある発言に、彼は怪訝そうに眉をひそめる。

「誰だよ？」

すると宮間はニヤニヤとしたいやらしい笑みを浮かべ、

「輝閃さんだよ」

と言った。

「……………へ？」

その名前に一瞬だけ胸が跳ねる。

「輝閃さんって……隣のクラスにいる、あの輝閃皐月さん!？」

彼が再び問い返すのも無理はない。

輝閃皐月とは、容姿端麗才色兼備しかも文武両道の完璧超人で、男女分け隔てなく人気のある学園のアイドルである。多くの男性からの憧れの的であり、彼もまた例外ではなかった。

「ああ。内藤さんと来月の文化祭の話をしながらクラスに入ってきたんだ。なぜか学園指定の鞆を持ってたのが不思議だったけど。それは足元に置いて、ちょうどお前にお尻を向けた状態で内藤と話してた」

「マ、マジかよ……」

彼は無念そうに肩を落とした。もちろんお尻が見えなくて残念がつているわけではなく、輝閃の姿が見られなかったことが残念だったのだ。起きていれば良かったと後悔する。

「いやぁ眼福だったね。やはり美少女ってのは見るだけで心が癒されるなあ」

「……なんで起こしてくれなかったんだよ」

宮間が自慢するように言ってくるので唇を尖らして文句を口にす。輝閃さんの姿を一目見ていれば、この陰鬱とした気持ちが少しは晴れていたかも知れないのに。

「すまんすまん。輝閃さんの良い匂いをかぐのに夢中で気付かなかった」

宮間はどうかやらいフェチ（変態寄り）のようだ。

「にしても、輝閃さんってヤバイくらい綺麗だよなあ。好きな人がいるらしいけど、……そいつが羨ましいや……」

「へっ？」

その宮間の呟きに彼は驚きの声を上げる。

「輝閃さんって、好きな人がいるのか!？」

「ん？ ああ。先週十七人ぐらいに告白されては振ってるんだけど、全員に『私、好きな人がいるんです』って言って断ってたから間違いないんじゃないか？」

「……そう、なのか」

少し……いやかなりショックだった。彼女に仄かな恋心を抱いていた彼は少しだけ失恋の痛みを噛み締める。やがて平静な顔を浮かべると、宮間の話の続きに耳を傾けた。

「フツ。これでも輝閃皇月ファンクラブの副会長だぜ？ 彼女のことならなんでも知っている。例えば彼女のスリーサイズは、バスト不明ウエスト不明ヒップ推定八十七だ！」

「全然わかってねーじゃん！ しかもなんでヒップだけ推定で数字だしてんだよ！」

「俺の好みの問題だ！」

断言する宮間。こつもハッキリ言われると男らしく聞こえるのはなぜだろうか。気のせいには違いのないのだが。

「もちろんちゃんとした情報もあるぞ。小学三年生までは俺達と同じ学校に通っていたとか」

「え、そうなの？」

彼と宮間は中学校を卒業してから聖帝第二学園の高等部に入学しているクチである。

「ああ。で、四年生になってからここに転校してきたそうだ」

「えらく中途半端だな」

「なんか都合があつたんじゃないか？ さすがにプライバシーなことは詮索するのよくないから輝閃さんに聞けなかったけど」

「……って本人に聞いてたのかよ」

どうやら全ての情報は本人に直に聞いていたようだ。……つまりスリーサイズは教えてもらえなかったのだろう。

「輝閃さん、三年生まではいたんだな。……まったく覚えてないや」

「まあ、お前はその頃女遊びに夢中だったしな」

「……なんだよそれ」

冷やかすような宮間の口ぶりにムツとする。

小学三年生の頃、彼は毎日のようにある女の子の家によく遊びに行っていたのである。その子は体が病弱なため外で遊ぶことができないので、二人でおままごとをしたり、話をしたりして時間を過ごしていた。

ある日突然、その子がいなくなるそのときまで。

「毎日毎日、俺の誘いを無視して女に会いに行くなんて、薄情な奴だなあなんて思ってたなあ頃は」

「……仕方ないだろ。約束したんだから」

もう当時のことはうつすらとしか覚えていないが、その女の子と約束していたことだけはハッキリと覚えている。

病弱で外に遊びに行けず、学校にも稀にしか来れなかったので友達がいなかったその子が可哀想で、幼い彼はわざわざその子の家まで赴き、面と向かってハッキリと言ったのだ。

俺がお前を友達にしてやる。だから、毎日遊びに来てやるよ。

どうしてそんな行動をしたのか。その理由は覚えていない。ただ、

遊びたい盛りだった彼から推察するに、……もしかしたらその子に
対して淡い恋心があつたのかも知れない。

その子とは一ヶ月も経たないうちに別れることになり、当時のこ
とは深く記憶付けられていないので真相は分からずじまいである。

「……そんなことより、輝閃さんの好きな人の情報は入ってないの
か？」

自分の話からそれとなく逸れるようにそう聞くと、宮間は深く沈
んだ表情で答えた。

「教えてくれなかった……！」

「……少しは自分で調べろよ」

と、そこで終業のチャイムが鳴り、委員長の号令で礼が終わるや
否やクラスメイト達がそれぞれ帰り支度をし始める。

「なあ、出流」

余計なものは持つてこないで弁当箱以外なものも入っていない学
園指定の鞆の中に教科書を入れようとしていると、先に帰り支度を
整えていた宮間が最後に一つ聞いてきた。

「なに？」

「もしも輝閃さんの好きな人が分かったら、どうするんだ？」

「そんなの、決まってるだろ……」

その問いに、彼は若干の微笑を称えて答えた。

「そんな幸せ者、この手でぶっ殺してやるよ」

どうやら彼は真相を知ったとき自殺するそつだ。

(くづく)

第3話「それは失恋なのか」

「…………マズったなあ」

すっかり薄暗くなった廊下を歩きながら出流はそうばやいた。

さつさと帰ろうとしていた彼だったが、暇潰しに何気無く寄った図書室で『山羅くんの不幸』という実話を元にして創られた小説を発見してしまい、別に読もうとも思っていなかったのになぜか体が勝手に動いてそれを手に取り、今まで読み耽つてしまっていたのである。さすが“読んだ者までも不幸にする物語”と銘打っているだけのことはある。もう二度と読むものかと彼は誓った。

でも主人公の山羅くんってホント可哀想だったなあ…………、と見たことのない実在する少年に若干の哀れみを感じながら廊下の角を曲がり、靴箱に差し掛かったところで彼は思わず立ち止まった。

(…………話声?)

女の子の話声に一瞬だけ躊躇したのである。大事な話をしているところだったら悪いし。

それはそれで良い心掛けかも知れないが、耳を澄ましながら前屈みでこっそりと様子を伺うその姿は盗み聞きをしている姿としか思えないのだが。

「……………それで、どうして好きになったの？ あの人のこと」

しばらくして、喧騒のない夕暮れの校舎に静かに澄み渡るように、彼の耳にそんな声が響いてきた。

（うわ……………恋愛事かよ）

彼は更に出るに出られなくなった。女子の恋愛話は男子には少し気まずいものがあるのだ。

……………それにしてもこの声、どこかで聞いたことあるような。

それが気になり、だんだんと覗き込むように彼の体が前へと傾いていく。もはや完全に盗み聞きスタイルであることに気付いていない。

やがて、こちらに背を向けている女子の姿が視界に入った。この後ろ姿は……………内藤？ 三つ編みに、さっきの声から同じクラスの内藤の姿が噛み合う。

そして、もう一人。

（あ、あの方は……………！）

限界ギリギリまで覗き込む彼の視界に、内藤と向かい合うように立つ女子の姿が、見間違えようもなく飛び込んできた。

見目麗しき顔立ち。プロポーション抜群の身体。

見間違えるはずがない。

（輝閃皐月さん……！）

密かに憧れる想い人の姿に彼の胸が一際大きく高鳴った。

（……え、ちょっと待てよ。ってことは、……まさか、輝閃さんの好きな人の話をしてるのか……？）

さっきの声が内藤のならそれが妥当だろう。……それに、ここから見える彼女の顔は、内藤の言葉に対してどう答えようかと悩み、頬を赤らめて恥ずかしげにはにかむ恋する乙女表情に他ならなかった。

（……………）

彼は複雑な気持ちになり、彼女の顔から目を背けるようにうつ向いた。聞いてみたいと思う反面、聞きたくないという気持ちも強くあり、その葛藤があったのだ。

「……私が昔、病弱だったこと、知ってるでしょ？」

しかし彼のその葛藤を打ち消すように、凜とした響きのある声が聞こえてきた。それにハツとして顔を上げる。

「……そのせいで学校に行っても友達が出来なくて、いつも教室に一人でポツンと座ってるだけだった」

そんな彼女の独白に、彼は少なからず驚いた。スポーツ万能でなんでも出来るから、てつきり昔からそうだと思っていたからだ。

（輝閃さんって、昔は病弱だったんだな……）

彼は彼女の言葉に、ふと今日久しぶりに思い出すことになったあの女の子のことを思い浮かべる。

あの子は今、どこでなにをしているのだろうか。

「……学校には稀にしか行かず、ほとんど家で過ごしているだけだったから、このままずっと学校に行きたくないってあの頃は思ってた。……でも、それだとお姉ちゃん達が寂しそうな顔がするから、元気なときは我慢して学校に通ってたんだ」

だけど、と。

そこで、それまで寂しそうに語っていた彼女の頬に、僅かに赤みが差す。

「……そんな私にも、小学三年生になってようやく初めての友達がうつん……」

首を振り、恍惚とした表情を浮かべ、そしてまるで神に祈るように手を組み、うつとりと、微笑んだ。

「……運命の人に出会えたの！」

その姿に。

(……ああ)

と。彼は肩をガツクリと落として溜め息を吐く。

ああ、……そうか。彼女はそんなにも、その人が好きなんだな……。

そこには入り込む余地などヨクト単位ほどにもないと、見せ付けられた。それも、完膚なきにまで。

「……でもね、せつかく運命の人に出会えたのに、たった一ヶ月で私は転校することになったの」

そう言っ て彼女は哀しそうに視線を落とした。

(……一ヶ月?)

彼は彼でなにかが引つ掛かったのか、その単語に視線を落として考え込む。

「え、と……確か輝下小学校から転校してきたんだっけ？」

その内藤の思い出すように発せられた声に、

（へ……？）

と彼はハツとして顔を上げた。

輝下小学校というのは、彼が小学生時代に過ごした学校の名称なのだ。

（……え、えーと、つまり？）

心臓が早鐘のように脈打ち始める。思考は焦りでままならなくなり、落ち着かせるように胸に手を置き、最初から順番に整理していく。

彼女は自分と同じ輝下小学校に通っていた。

しかも、病弱のため稀にしか学校に行けなかった。

そして、……小学三年生になってようやく、友達が出来た。

それも一ヶ月の間だけ。

（まさか……？）

そこから導き出されるであろう答えに、彼はゴクリと生唾を呑み

込む。

「……でも私は今でもハッキリと覚えてる。たった一ヶ月の間だったけど、あの人と一緒に過ごした大切な日々のことを」

(……まさか……)

あの一ヶ月は、彼にとっても大切な思い出の一つ。彼女に笑顔を向けられるだけで、ムズ痒くなるような、思わず笑い出したくなってしまうようなあの気持ちだが、“恋”だと知らなかった幼き日の思い出。

「……そして、一人ぼっちだった私を救ってくれた、あの人の言葉を」

(……まさか……!!)

それは、彼が今でもハッキリと覚えている言葉。

二人の、思い出の言葉。

あの言葉が、今まさに、彼女の口から再びつむがれる

「俺がお前を“奴隷”にしてやる。だから、毎日コキ使ってやるからこの雌豚が」

思い出が台無しだった。

[illegible]

彼は声なき絶叫を上げた。口をこれでもかというくらい大きく開けている。

（それ絶対俺じゃねえッ！　だって俺、友達にしてやる、って言ったんだから！　っていうかなんという鬼畜！　小学生にして恐ろしいガキだなあオイ！）

まさか小学三年生にしてそんな鬼畜発言するような奴がいるとは世も末だ。……それがまさか自分が言ったことになっていると彼が知ったらどんな反応を見せてくれるだろうか。

(……にしても、そんなことを言われてもあんなにも想ってる輝閃さんもかなり変わってるよなあ)

と思いつながら、それだけ想つてることか、と一人苦笑を浮かべる。

「ほ、ホントにあの人ってそんなこと言ったの？」

彼女の好きな人を知っているらしい内藤が信じられないといった口調でそう聞いた。

「本当だよ。私はその言葉を聞いて一瞬であの人の虜になったんだから」

……ま、まあ、なにはともあれ。

彼女がその人を愛していて、そこに入り込むことは決して出来ないことを知っただけで彼は満足する。

(……だけど、まだ好きでいることぐらいは、いいよな?)

彼女に好きな人がいて、しかも純粋にその人のことを一途に想っていることを知り、哀しい気持ちで一杯だったが、それでも祝福してやろうと彼は思う。

だけどそれでも諦めきれない気持ちはあった。だからせめて、その人と結ばれるまでは好きでいさせてほしい。

そして彼女がその人と結ばれた日には、……泣くかも知れないが、精一杯祝って、スッパリと諦めよう。

まあ、もし相手が宮間だったら殺してしまうかも知れないが。

そんなことを本気で思いながら五歩ほど後ろへ下がる。そして、わざとらしい足音を鳴らしながら、今来ましたという感じで姿を見せた。

「え、飯石くん……!？」

するとこちらを振り返った内藤の驚く顔が視界に入り、

「……………えう？」

彼の突然の登場に呆然とする、彼女の表情が視界に入った。

「……………あ、ああ……………う、う……………?」

顔がまるでヤカンが沸騰していくように真っ赤になり、目には涙が浮かんで瞳が潤み出す。

「へ?」

その不思議な表情の変化に、このまま通り過ぎようとしていた彼も思わず立ち止まった。

「あ、……………あああううううう……………」

彼女がいよいよと首を振ったかと思えば、すぐ近くにいた内藤の背中に周り、まるで彼の視界から逃れるように隠れた。

「えー……と……」

彼は酷く傷付いた表情をして内藤を見る。目が合った内藤は気まぐすそうにしながらも、彼を慰めるようにフォローをした。

「……こ、この子はね、えーと、ちょっと人見知りが激しいというか、恥ずかしがりやなのよ。だ、だから気にしなくていいよ？」

アハ、ハ……。内藤の乾いた笑い声が虚しく辺りに響いた。

「ハハ、ハ、そ、そうか。うん。わかった。じゃあ、俺はこれで」

そう言いながらチラリと内藤の背中を見る。こちらをチラチラと窺っていた彼女と目が合い、『ひう！』と顔をボツと真っ赤にする
と顔を隠された。

「……………」

俺って嫌われてたんだ。そう勘違いした彼はいたたまれなくなり、涙目を見られないようにすぐに顔を背けると、靴箱から自分の靴に履き替え、足早にこの場から立ち去った。

やがて泣きながら走り出すことになるのだが、それは二人が彼の姿が見えなくなってからである。

(\cup)
(\cap)

第4話【彼女の決意】

「……行っちゃったよ、飯石くん」

そんな内藤の呆れた声に反応して、背中を両手で掴んでいた彼女はようやく手を離し、顔を上げた。

「そ、そんな……」

目元を涙で真っ赤にさせた彼女は哀しそうに肩を落とした。

「どうして……？ どうして行っちゃうの……？」

「……あなたがあんな反応をするからでしょ」

はぁ、と溜め息を吐く。

「……だ、だつてえ。……だつて！」

人指し指と人指し指をツンツンと合わせながら、上目使いで内藤を見る。

「……………恥ずかしかったんだもん」

……つまりは、そういうこと。

なぜ彼女が、ストーカーまがいの行動をしているのか。

その理由が、それ。

ただ単に、恥ずかしかったただけなのである。

「まったく……」

腰に手を当て、この恥ずかしがりやの友人を改めて見る。

彼女と知り合ったのは、ちょうど彼女がこっちに引っ越してきた頃のこと。近くに良い医者がいるということであたらしく、それはある意味では正解だった。病弱だった体はまるで嘘だったかのように元氣になり、聖帝第二学園小等部に入ってから今は今まで皆勤を更
新中。

医者が言うには心の変化によるものだろうということ。それは引っ越したことによる環境の変化がもたらしたのか、それとも彼と別れたことによる心の変化が原因なのかは、分からない。

ずっと友達として一緒にいた内藤には、彼女がどれほどまでに彼のことを愛しているか嫌というほど知っているの、おそらくは後者だと思っている。

それに今では才色兼備で文武両道の彼女だが、それは生まれつき

備わっていたものではなく、『出流様のために強く、美しくなりたい』という努力の賜物だ。

そうして彼と再び会える日が訪れるまで自分を磨いていたというのに。

いざ会えば、どうしようどうしよう怖い怖い怖い、と怖じけついて声すら掛けられない始末。彼も、彼女が変わり過ぎているので仕方ないが、すっかり忘れているようで感動の再会というキツカケを得られない状況である。

なお、余談だが小学生の頃も頻繁に告白されていた彼女が、『この身体は全て出流様のもの』と言って断っていたのをやめさせたのは内藤である。内藤のおかげで、『お前が出流か……殺す!』という闇討ちになる自体を免れたと言っても過言ではないだろう。

そんなことを思いながら、落ち込んでいる彼女に詰問するように聞いた。

「それから、あなたでしょ？ 飯石くんの弁当箱をすり換えたのは」

それに対して彼女は、パア、とまるで花が咲いたような幸せな笑顔で元氣良く頷く。

「うん！ えへへー。自信作なんだー」

そのとろけるような笑顔に、同性である内藤も思わずうめいてしまう。反則なほどの可愛さだった。

「……コ、コホン。き、今日は私が食べなさいって言ったから渋々

食べてくれたけど、もうあんな渡し方はやめなさいよ」

あんな渡し方というのは、鞆ごと入れ換えるという荒業のことである。彼の眠っている休み時間に、わざわざ鞆を持ってやってきたのはそのためだ。もちろん、彼が鞆の中身を弁当箱以外空にしていることを事前に知っているからこそその業である。

……まあ、なぜ今日初めて作ってきたはずなのにあの弁当箱を使用されるのを知っていたのかはミステリーだが。

「で、でも……」

「でも、じゃない。やるなら手渡しにしない」

「そんなことしたら、私死んじゃう！」

「死ぬな！」

なんとという恥ずかしっぷり。内藤は額を手で押さえて上を仰ぎ見た。これは先が思いやられる。

「……そんなのだと、いつか別の女の子に飯石くんを取られちゃうわよ」

「……え……？」

内藤の溜め息混じりに何気無く呟いた言葉に、彼女は一瞬固まり、

「……え、えぐ。……ふ、ふええええん……」

床に座り込むと、なんと本気で泣き始めた。

「ち、ちょっとどうしたの!？」

まるで自分が泣かしているようで焦る内藤。

「だ、だって、ひつく、み、美代子ちゃ……っ……んが恐ろしいことい、
っ言っんだもん……」

「そ、それはそうなるかも知れないって例えのことよ! ほら、泣
きやみなさい!」

よしよしと頭を撫でる。まるで子供扱いだが、どことなく子供っ
ぽい彼女には適切な対処かも知れない。その証拠に、だんだん落ち
着きを取り戻してきた。

「……そ、それに、えぐ、だ、大丈夫だよ」

涙をハンカチで拭いていると、彼女は内藤にそう告げた。

「大丈夫って、なにが?」

なんに對しての大丈夫なのか分からず、聞き返す内藤に彼女は答
えた。

「もし、……もしもだけど、有り得ないけど、絶対に有り得ないけ
ど、有り得るかも知れないけどほぼ百パーセント有り得ないけど、
たとえ宇宙が滅びてしまおうとも、」

前置きが長すぎる。内藤は彼女の頭を軽く叩いた。

「イタ。……え、えと、も、もし、出流様に彼女が出来ても、大丈夫なの！」

出流様……。聞き飽きてる内藤にとっては慣れているが、他の人が聞いたらかなりの誤解を抱きそうな呼び方である。

「なんで大丈夫なの？」

まさか、殺すから、なんて言わないよね？ そんなことを言い出したらどうしようかと思ったが、それは杞憂だった。

「私が出流様の彼女に『愛人』になれるように交渉するから」

なぜならそんなことよりも更に厄介なことを言い出したからだ。

「……するな！」

とりあえず、頭を叩いておいた。

「イタ。……そ、それに、それだけじゃないもん！」

それはもう自信満々に言い放った。

「だって私、出流様のお義母様とお義父様に『息子を任せる』ってお願いされたんだから！」

なんとなくおかあ様とおとう様の発音に違和感を感じたが、それは無視することにして内藤は当然の疑問を口にする。

「……いつから、飯石くんのご両親と面識を持ったの？」

「出流様が入学したその日、出流様に話し掛けることが出来なかったので家に侵入したんだけど、そのときに出流様の御両親と面識を持ったの」

凄い。なんというか、話し掛けることが出来なかったから家に侵入するという思考回路が。

「そ、それであなたはなにを言ったの？」

だいたい予想できるが聞いてみる。

「『お願いしますお義母様お義父様。私を出流様の奴隷にしてください』って土下座したの」

予想通り。

「そ、それを聞いて飯石くんのご両親はなんて？」

「お義父様は『喜んで！』と手を叩き、お義母様は『息子をよろしくお願いしますね』と私を撫でてくれた……」

嬉しかったのか、えへへ、と頬を弛める。

「へ、へえ……」

それは予想外の反応。

「それで、『海外に出張に行くから息子をよろしく頼むよ』と頼まれたから、私が毎日出流様の家に赴いているんだ」

……そう。

彼の父親が言った、ある人、とは彼女のことだったのだ。

だから彼女が、彼が寝坊しないようにと毎日ピンポンダッシュ……
…もとい、朝のモーニングコールをしていたのだ。あながち、宮間の言葉は間違えではなかったのである。

「でも、だからと言ったって……」

自慢するような彼女に、宮間は冷静に忠告する。

「あなたがその飯石くんだけにシャイな性格になるのをどうにかしないと、いつまでもこのままよ」

「もっともな言葉。」

「……………うん」

それはどうやら彼女も十分承知しているようで、そのためには自

分のこの性格をどうにかしなければと危機感を抱いているらしく、
彼女はグッと拳を握ると、なにかを決意したように強く頷いた。

（つづく）

エピソード【未来（さき）はまだまだこれから】

「……………はあ」

ベッドの上で寝返りしては溜め息を繰り返すのも何度目のことだろう。

まあ、それも無理もない。密かに恋していた彼女に実は好きな人がいると聞かされ、しかも本人からハッキリと肯定され、そして拳げ句の果てに自分を嫌っていると気付いて、かなり落ち込んでいるのだから。

それが誤解であることを知る由もない彼は、自分が彼女に対してなにをしたのか思い浮かべてみる。話をしたことすらしていない相手に、あんなにも嫌われてしまうような理由ってなんなんだ？

もちろん見付かるはずもないのだが、自虐的になっている彼には誤った理由が次々と思い到ってしまう。

（まさか輝閃さんを見るこの目がイヤラシかったとか？ 俺の顔が見るに堪えなかったからか？ それともまさか、俺の存在自体に嫌悪してるんじゃないか……？）

案の定、更に気持ちが悪くなってしまふ。目を潰そうかな、なんて呟くのもはや末期症状にまで陥っていた。

しかし、そんな状態になりながらも、心の片隅にあるのは昔のこと。

久しぶりに昔のことを思い出し、あの女の子と彼女の姿がなぜか被ってしまうのだ。別人なのに。なぜこうもちらつくのだろう。それとも、自分はある子に会いたいと思っているのだろうか。

そりゃあ、正直言えばまた会ってみたいとは思っている。会ってどうしたいかは良く分からないが、とにかく、一目でもいいから会ってみたいと思う。

そこまで考えてから、ふと自嘲気味に笑った。

「女々しいな、俺」

そう口にしてゆっくりと目を瞑る。瞼の裏に視界が閉ざされ、闇だけの世界が広がった。

なんにもない暗闇だけの世界。なんて面白みもないだろう。

そんな八つ当たりじみたことを思いをしながらしばらくすると、……やがてその世界に、ボウと浮かび上がってくるようにあの子の姿が現れてきた。

（え？）

という疑問を浮かべる間もなく、その子の周りの状況もまたおぼろ気に浮かんでくる。

どこかの家の、誰かの一室。

おままごとをして遊んでいるらしい彼女は、ただ一人の遊び相手に向かつてお願いをしていた。

「……ねえ、出流様。お願いがあるんだけど、いい？」

い、出流様？

なんて呼ばせ方をしてるんだとガクリとしそうになる。と同時に、これは夢なのだとすぐに気付く。

……一目会いたいと思ってたらこれかよ。

こつもハッキリと夢だと分かる夢は久しぶりだ。明晰夢のようなものだろうか。……でもまあ、なかなか粋なことをしてくれるじゃないか、俺の脳も。

「お願い？」

彼女の言葉に首を傾げるのは幼い自分だろう。なんなんだろうと興味津々で先を促していた。

「……う、うん。あ、あの、……あのね！」

勇気を振り絞り出すように、彼女はその“お願い”を口にした。

「大きくなったら、私と結婚してくれる？」

.....。

..... ああ、あつたな。そんなことも。確か。うん。そう言われたような、気がする。

子供じみた大胆な告白に虚を突かれるも、なんだか無償に微笑ましくなった。あー、あー、そういうこともあつたっけなー。なんだから恥ずかしいや。

えーと、それで俺ってなんて答えたんだっけ？

..... んー、と、うん、そうそう。なんか、軽くオーケーの返事をしたと思う。

彼はそんなことを思い出していたが、夢の中の彼は全く違う言葉を口にしていた。

「嫌だ」

否定の言葉。それに驚愕する彼に、傷付いた表情をする女の子。

そして更に彼は続ける。

「だってお前は俺様の“奴隷”だもん。身のほどを知れこの雌豚が」

この鬼畜野郎オオオ！

そう涙ながらに殴りかかったところで悪夢の鐘が彼の脳裏に響いた。

ピンポン……。

「……！？」

一瞬にして覚醒。枕元の時計を見る。五時半。窓の外はまだ薄暗い。来やがったなピンポンダッシュ野郎取っ捕まえてやる。ベッドから飛び下りる。窓の鍵を開ける。息を吸い込みながら窓を解き放つ。

「来やがったなこの野郎オオオ……オ……オ、お？」

最初の怒声も一気に尻すぼみ。彼は目をパチパチと瞬かせた。

ここから見える玄関前の人影は、見間違えではないのなら、輝閃
皐月さんではなかるうか？

（え、なな、なに？　なんで輝閃さんが？　え？　犯人？）

そう思いながら、改めて周りを見て状況の把握に努める。そうい
えば、呼び鈴は一回しか鳴っていなかったような。それに五時半だ
けど、今は朝ではなく、夜なのでは？

「……………」

「……………」

困惑しながらも、いったいなんの用なのだろうとドキドキしてい
る彼に、

決意を込めながらも、それでも躊躇して言えずにドキドキしてい
る彼女。

……そんな、二人の姿を見て分かることは、ただ一つ。

それは、二人が両思いだと気付くのにそう時間は掛らないだろう、
ということだ。

（おわり、）

……にしたいのだが、

「む……」

それだけで黙り込んでしまう彼女。

「む？」

そして思わず聞き返す彼に向かって、

「無理無理無理無理無理絶エツ対ッ無ウ理イイ！……！」

と子供が駄々をこねるような泣き叫ぶ声が貫く。

「へ？ え？」

彼はポカンとする。しかも彼女は五メートルほど後ろに離れて見守っていた人……内藤に向かって駆け、すぐさま彼から見えなくなるように背中に隠れた。

「駄目ッ！ 無理ッ！ あの人の顔を見たら（頭が真っ白になって）なにも言えなくなっちゃう！」

彼の硝子のハートが釘バットで粉々になった。

「な、なに言ってるの！ 覚悟を決めた、って言うから付いてきてあげたのになにもしないつもり！」

「だ、だってだって！ あの人に話し掛けられたりでもしたら（恥ずかしさのあまり）死んじゃうもん！」

更に追い討ちをかけるように粉々になったハートがブルドーザーで細かく潰されていく。

「ホントにもう！ なんてこういうときは意気地がないのよ！ 来なさい！ 私が無理矢理でも連れて行ってあげるわ！」

「い、いやああああ！ 助けてえ！ 助けてえ！！！」

俺の家はどこぞのヤクザの事務所か？

塵になった硝子のハートを扇風機で遙か彼方に飛ばされた彼は、ここから落ちたら死ぬるかな、なんていう危険なことを真剣に考え始めている。

嫌だ嫌だと泣き叫ぶ彼女からは、本当に彼のことが好きなのだろ

うかという疑問しかない。

ただ、内藤が今まさに感じていることは。

奇しくも、この物語の締めとなる言葉と、一致していた。

どうやら、二人が結ばれるのはまだまだ先のことになり
そうだ。

（おわり）

エピローグ【未来（さき）はまだまだこれから】（後書き）

どうもー。

はじめましての人ははじめまして。

お久しぶりの人はマジお久しぶり！

紫水晃でっす。

えー、このある意味では私自身初めての完結作品であるこの『シヤイデレ！』楽しんでもらえたでしょうか？

シヤイでデレな女の子の話でしたかな？ そのまんまですね。ホントはヤンデレにしようと思ったのですが……自重しました。

えーと、実は短編として出そうと思っていたのですが、私には話を長引かそうとする悪い癖があるようで、結局、連載という形にしました。

最初の前書きにもあるように、この物語はマジで勢いで創った作品のため、そしてマジで五時間ジャストで創ったため、誤字脱字があるかも知れません。しかも更新日である今日創りました。なんとプロットからこの後書きの……まあ『どうもー』のところまで。

え、仕事？ 明日もあるがなにか？

いや、なに。本当に久し振りに思い出しましたが、物語を創るって面白いですね！ もう時間を忘れるぐらいに。だから、後悔はこれっぽっちも……ごめんなさい嘘です。今まさに後悔しているところです。

それから、作品のどこかにあったと思いますが、別作品の『山羅くんの不幸』をちゃっかり宣伝している私はダメ人間だろうか？

まあ細かいことは気にするなと自分で自分を慰めているからもう立ち直りました。うん。ホントだよ……？

とまあくだらないことばかり述べてきましたが、ここまで読んでくれた読者の皆様に感謝の意を！ 感想？ そんなものあっても成

長できない私には不要！ 他の作品に感想をあげなさい！ 『シャ
ーペンシルを武器にする』 ような萌萌えなところや 『先生は17
歳！？』 という疑問系だから偽りだなと怪しむところや 『力力の天
下』 なんていう力カア天下のことかーとクリンを殺された怒りを
もつようなところやまあと他いろいろ！ すまない他の作品たちよ
！ 真っ先に浮かんだこの三つでもう限界だ！ みんな平等にした
いが無理だ！ だからせめて、この俺が応援しまくってやるぜええ
ええ！

……はあ、疲れた。

それじゃ機会があればまた会いましょう。

ではでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3663e/>

シャイデレ！

2010年10月10日15時49分発行